

## Place

天国と地獄の島

八月の太陽の下、島に向かって飛び立った飛行機は、熱風の中を一時間ほどゆらゆらと漂った後、ゆっくりと下降しはじめた。だんだん間近に迫ってくる地中海の海面に浮かんだ島の突端は、まるで青い海の底から頭をもちあげた竜の頭ようである。竜は怒りにみちた赤い目で海面をにらみつけているように見えた。空港から町へと向かう。シチリアの乾いた風は、天からのあらゆる恵みを撥ねつけるように吹き荒れている。辺りの山々は、あの竜の頭と同じように、強い太陽に灼かれ、乾いた風にさらされて、赤茶けた肌をむき出している。30分ほど走ると、町はずれが見えてきた。渋滞していらだつ車があふれる町のあちこちには、埃をかぶった店が並んでいる。ガソリンスタンドの脇の角の洋装店はもうとうに営業をあきらめてしまったようだ。ショーウィンドウに書かれた店名らしい文字はほとんど消えかかって、中には囚われた女たちのようなマネキン人形が押し込められている。



シチリアの州都パレルモの中央駅から、町を真っ直ぐにつらぬく大通りがある。古い王朝の名残りの荒れ果てた石造の建築物が延々と立ち並ぶ大きな道は、この世のあらゆる恐怖を見てきたかのような不吉な表情をしている。朽ちた建造物の窓と窓からは今にも亡霊が飛び出してきそうである。

そして、それを阻止するかのように、ルネッサンス式の端正な石の彫像があちこちから通りを見下ろしている。頭上では亡霊と彫像が戦い、怪しい路地裏では天国へ行くためのさまざまな悪事がなされていることだろう。悪魔の表情をもつ街から少し離れた、乾いた山々の一番高い所に、天使の町、モンレアーレがある。素晴らしく均整の取れた庭を持つ修道院と、高く天を指し示すビザンチン様式の教会堂に見守られたおだやかで幸せな町。高く見上げる聖堂は、イスラム式の黄金のモザイクがはりめぐらされ、祭壇を囲む壁には、キリストの復活の物語が色鮮やかなモザイクで描かれており、聖堂の内部は文字通りおごそかに光り輝いている。そして教会堂の一番天に近いところにある塔からは、下界に向かって鐘が打ち鳴らされる。

まるで、恵みは上方から来るというように、  
 まるで、幸せは黄金の光がもたらすのだというように。  
 青い地中海に浮かぶシチリア島。  
 あたかも天国と地獄が同時にあるようなところ。  
 乾いた風と、複雑で豊かな表情をもつこの場所は、  
 いつまでも心にどっついて離れない、  
 この世のすべてを知った島……



## COLUMN

鎌倉の猫事情 第四十三話

暑くて長い日本の夏の訪れは、子猫達にとっても災難です。

遅い春に産まれた子猫達は、夏の始まりとともによちよちと歩き始めます。産まれたばかりの時には、どの子猫も頭から尻尾の先まで真っ白な上、寄り集まって眠っていますから、白い毛玉のようで、何匹いるかもわかりませんが、一匹一匹、産まれた箱から頭をのぞかせて、冒険に出かけるようになると、ようやく子猫たち全員の全貌がわかってきます。一ヶ月頃の子猫たちは、よたよたと歩きまわりながら、どこかに落ちていたり、電気のコードにじゃれているうちに、体にコードがこんがらがって動けなくなっていたり、一刻の油断でもできません。一日に何回かの点呼が必要です。一つ、二つ、三つ……

そんなとき、母猫は案外あてにならないものです。なにしろ、二つ以上の数は一つ、二つ……？ 数えられないようです。六匹いるはずの子猫が一匹足りなくても案外気がつかないみたいです。親猫があてにならない以上、人間たちの徹底的な捜索によって、ベッドの下の隅、枕カバーの中、棚の隙間、どこにいても探しあてて保護しなければなりません。その上、この季節には猫の天敵、蚤が子猫たちに取り付きます。親たちの蚤の駆除はするのですが、歩き始めの子猫たちに薬は使えませんから、利口な蚤は、子猫達の温かくて柔らかく、しかも駆除されない安全なうぶ毛の中に逃げ込みます。蚤が異常発生した夏には、真っ白な子猫達がまるでゴマ団子のように蚤にやられました。毎日ヨレクホールのスタッフ達で、かわるがわる泣きわめく六匹を水風呂に入れ、すばしこく逃げ回る蚤を一つ一つ退治するのですが、翌日には又増えているという始末です。子猫達の夏の日々は危険がいっぱいなのです。当然私たちも無傷ではいられません。ヨレクホール全員が体のあちこちに赤いぼつぼつをこしらえながらも、長い夏を乗り切らなければなりません。



to be continued

